

審査論文の要旨

本論文は清代の白話小説『紅樓夢』の成立過程を論じるものである。

『紅樓夢』は、曹雪芹により創作されたとされるが、没落大貴族だった彼の周辺には一族の人々がおり、かつての栄華の思い出を反映したこの小説の執筆が進む過程で、周辺の人々の意見が様々に反映されていった。その過程を示す多くの写本が残されており、そこからはある程度作品の創作過程を追うことができるはずである。また、当時『石頭記』と題されていたこの小説は、未完に終わってから数十年後に『紅樓夢』という題名で完成形として出版されることになるが、その過程でどのような操作がなされたかも、この小説を研究する上で重要な課題である。

『紅樓夢』には非常に多くの先行研究があるが、これらの問題については一致した通説と呼ぶべきものはなく、相互に矛盾した意見が並存する状態にあった。これは、小説の中から一部の記述のみをとりあげて意見を構築することが一般化していたためである。本論文は、主要写本の全文に精密な校勘作業を加えることにより、この問題に結論を下すことを目指すとともに、そこから明らかになった事実を通して、この小説がどのようにして作り上げられていったかについて、生成論的研究を行うものである。

『紅樓夢』の写本は多数にのぼるため、まず第一章において、各写本の回目(回〔章に該当〕の題名)の異同をもとに分類を加える。その結果に基づき、第二章では、現存する写本の中では古いものとされる甲戌本・己卯本・庚辰本について行った全文校勘作業を踏まえて、三者の関係を検討する。己卯本と庚辰本の内容は近く、甲戌本に比べて文章の修正や表記の整理が施された形跡が認められることから、甲戌本が先行して成立したと考えられる。一方、己卯本と庚辰本は近い関係にあるが、両者の間にも相違が見られるため、ほぼ同一の底本を基としながらも、それぞれ独自に改変が加えられた可能性が高い。甲戌本に比べると、己卯本・庚辰本では白話的かつ合理的な表現への改変が行われ、文章の平易化と文体の統一が図られていることが認められるとする。

第三章においては、甲戌本・己卯本・庚辰本について、金聖歎本『水滸伝』・張竹坡本『金瓶梅』からの影響という観点から、『紅樓夢』が創作される過程を検討する。その結果、各回の冒頭に置かれる批評と詩については、その有無や配置をめぐる試行錯誤が重ねられ、金聖歎本の形式を参照しつつ、張竹坡本と近い側面も見られるが、最終的には批評・詩をともに用いない簡略な形式が選択されたことが明らかになった。しかしその一方で、元来批評であった文が小説本文へと組み込まれていく過程も見えて取ることができる。これは、『紅樓夢』が本文中に作者による叙述を多く含むという、それ以前の『水滸伝』『金瓶梅』などの長篇白話小説には存在しなかった新しい叙述法を創出していく過程を示すものである。また、本文に金聖歎批評と同様の要素が含まれること、叙述において金聖歎が強調する視点人物の設定が認められることから、『紅樓夢』では『水滸伝』『金瓶梅』といった先行小説の手法や内容表現を受容しつつ、試行錯誤を経て独自の形式が形成されていった過程を明らかにする。

第四章においては、甲戌本・己卯本・庚辰本・甲辰本に共通して現存する回を中心に異同を分

析し、他の現存写本とも比較を行いながら、甲辰本と先行の三本の継承関係について考察する。その結果、甲辰本は全体として己卯本・庚辰本に近いが、第六回・第七回ではより甲戌本に近いことが明らかとなった。さらに、この二回を詳細に検討した結果、己卯本・庚辰本には口語的・演劇的・簡潔な表現への改変が認められるが、それらの改変は甲辰本を含む他の写本に引き継がれていないことが判明した。この事実は、これらの改変が己卯本・庚辰本に共通する底本において独自に加えられ、しかも他本には影響しなかったことを意味する。他方、細部においては甲辰本を含む各写本は甲戌本より己卯本・庚辰本に近い。つまり各写本は甲戌本でも己卯本・庚辰本でもなく、己卯本・庚辰本に認められる改変が加えられる以前の現存しないテキストに基づくものと見なさざるをえないとする。

第五章では、甲辰本と甲戌本・己卯本・庚辰本を比較し、甲辰本には形式の整備・表記の統一・表現の平易化、更にはシニカルな口調を和らげる傾向が見られることを明らかにした。これらは作品を読みやすくすることを目指すとともに、当時行われた言論統制をも意識したもので、すべて刊行を容易にするための配慮であると考えられる。以上の点から、甲辰本はもともと刊本の底本として作成された可能性が高いと結論づける。

第六章では、甲戌本・己卯本・庚辰本の冒頭に記された、創作過程における書名変遷の記述に見られる五つの書名について検討することにより、甲戌年以前における各稿本の成立過程について考察する。そして、おそらく第三段階にあたる「風月宝鑑」稿において追加された要素があると考えれば、小説の内容に認められる登場人物の年齢に関わる矛盾なども解決できると論じる。

第七章では、刊本『紅樓夢』全百二十回のうち、曹雪芹の手になると思われる前の八十回と、刊行に当たって付け加えられたであろう後の四十回を比較する。内容・表現手法・言葉遣いなどに多くの相違点が認められることから、両者が同一人物の手になるものではないこと、後の四十回は白話小説の一般的なパターンに即した内容を有することから、当時の読者に受け入れられやすい作品として、前の八十回と合わせて整理・完成・刊行する目的のもとに作られたものであると論じる。さらに、後の四十回との対照から、前の八十回がきわめて個性的かつ斬新な作品であることが浮かび上がると結論づける。